

「仲よくなれて、よい事ばかり♪」

—前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成—

I はじめに

II 実践のねらい

III 実践の方法

- 1 対象
- 2 基本的な考え
- 3 各実践のすすめ方

IV 実践の内容

- 1 「いろんな意味につながっているね」
- 2 「あいさつするってのはどうかな？」
- 3 「よし、しっかりとあいさつしていくよ!!」
- 4 「クラスがよりなかよく、一つになれた」

V おわりに

第11分科会
自治的諸活動と生活指導
B 中学校・高校

皆川 博之（名古屋・名塚中）

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

第72次教育研究活動に、県内より13本の貴重なリポートが寄せられ、「たくましく生きる子どもを育てよう」の統一テーマのもとに活発な研究討議がなされた。

本次教研では、「子どもの気持ちを大切に、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方」「リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方」「問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方」という課題に対し、熱心に討議をすすめた。活発な討議になるように、課題ごとに質疑応答を行い、最後に全体討議を行った。

リポートの傾向としては、主体性・自己肯定感・自己有用感・共感的な人間関係などのキーワードをもとに、認め合い学び合ったり、高め合ったりすることで、自他共に理解を深めようとする実践報告が多くみられた。

2 本次県教研で論じられた主要な課題

(1) 子どもの気持ちを大切に、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

集団で活動する中で、相手に共感し、肯定する態度を身につけ、互いの意見を交流し合うことで、さまざまな場面で自分に自信をもって行動し、自己存在感を味わわせることができたという実践が報告された。また、「計画・実行・評価・改善」をくり返し行う「PDCAサイクル」を活動の中へ取り入れたり、キャリアパスポートを活用したりして、生徒が主体的に行動できるようになったという実践も報告された。

(2) リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方

自分の役割を認識し、明確な目標を設定して学校行事へとりくむことで、集団への所属感を高めることができたという実践が報告された。また、自分たちの課題を仲間と共有するために学級会を開き、話し合いを重ねたり、縦割り活動の充実をはかったりすることで、主体的に行動することができるようになったという実践が報告された。

(3) 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方

ピアサポート活動を行うことで、コミュニケーション能力が育った実践や、防災学習にとりくみ、地域防災への意識が高まった実践が報告された。また、不登校生徒支援のための相互コンサルテーションの導入や、校内フリースクールを活用した実践と、マイノリティに配慮した実践もあった。

報告書のできるまで

第72次教育研究愛知県集会「自治的諸活動と生活指導」分科会は、第71次教研までの成果と課題にたち、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに、次の柱立てにより討議された。

- 1 子どもの気持ちを大切に、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方。
- 2 リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方。
- 3 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方。

数多くの具体的実践をもとに、成果を確認し、課題を掘り起こしていった。この報告書は、その成果と課題を中心に作成したものである。

助言者	杉本 一正 (愛知県一宮児童相談センター)	中沼 暁 (名古屋・楠中)
教育課程	西尾 盛二 (名古屋・東陵中)	太田 早織 (幸田・中央小)
研究委員	小檜山 亮 (海部・甚目寺南中)	富田 賢一郎 (名古屋・本地丘小)
	志知 佑太 (一宮・末広小)	小穴 光俊 (みよし・黒笹小)
	神谷 絢香 (岡崎・六ツ美南部小)	鈴木 潤也 (豊田・若園中)
	羽根田知樹 (名古屋・平針南小)	浅野 和也 (西春・清州中)
	松下 裕哉 (名古屋・千鳥小)	蟹江 陽平 (岡崎・男川小)

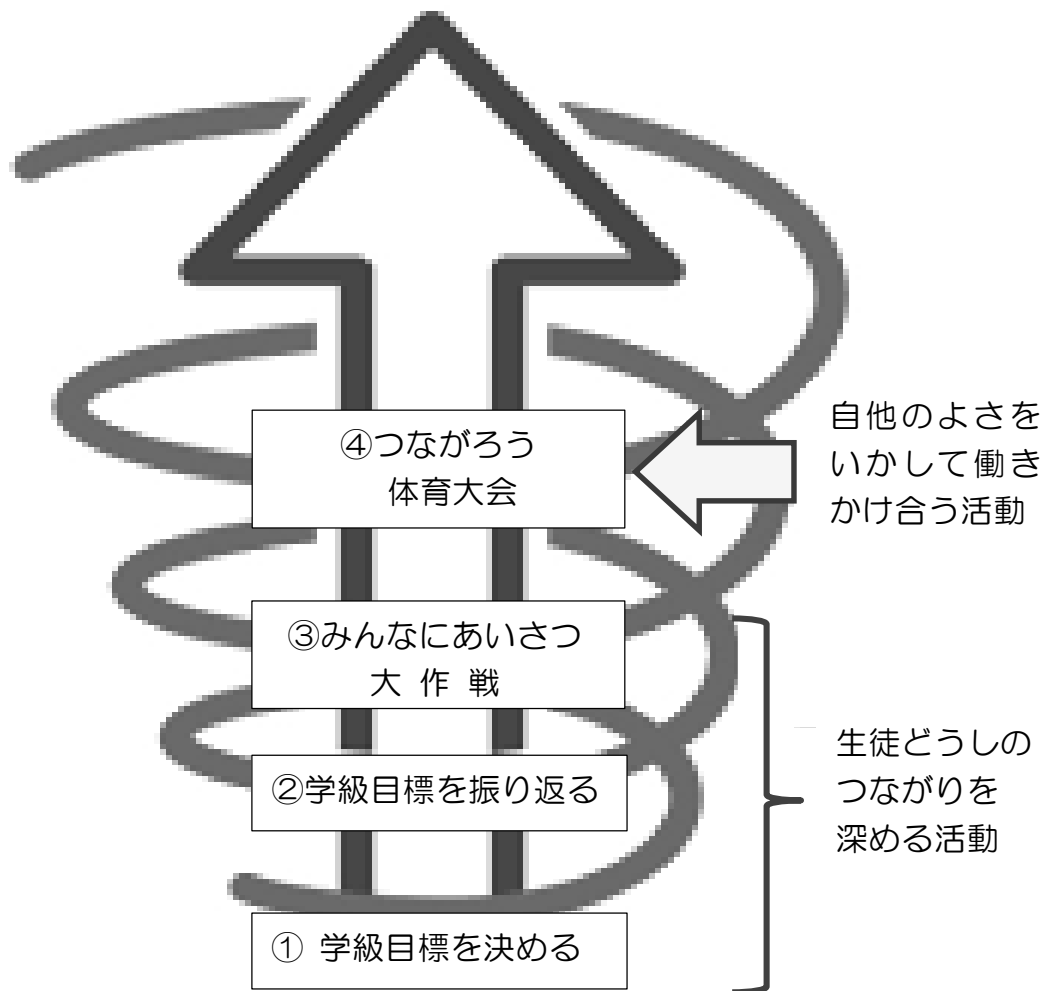
報告書の要点

わたくしが受けもつ中学校1年生は、明るく元気で楽しそうに学校生活を送ることができている。しかし、なかのよい生徒どうしで一緒に居ることが多かったり、行事以外では必要以上に級友とかかわろうとしなかったりする生徒もいる。

これは、他者とかかわることが苦手だったり、小学校の頃の間関係のもつれから不登校や登校渋りを経験し、他者と接する機会を自分から遠ざけてしまっていたりするなど、誰とでも上手に接することの大切さに気付かず、前向きな気持ちで行動することができないためであると考えた。

そこで、「生徒どうしのつながりを深める活動」と「自他のよさをいかして、働きかけ合う活動」を通して、前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成をはかりたいと考えた。そのため、次のような流れで実践にとりくんだ。

前向きな気持ちで行動することができる生徒



本実践の結果、多くの生徒が自分のよさをいかして、あいさつを交わしたり、係活動でも級友とともに一緒にとりくんだり、前向きな気持ちで行動することができるようになった。また、行事においても一つのことをみんなで成功させようと、認めたり、励ましたりしながら働きかけることができるようになった。

I はじめに

本校は、愛知県名古屋市西部に位置しており、庄内川を挟んで清須市と隣接している。名古屋市の中心部に近く、オフィス街へ通勤しやすいことから、マンションの集合住宅が多く、交通機関も発達している近代的な街になっている。一方、江戸時代の「清州越し」により、名古屋城へ都市が移転したことで、城下町の名残が見える街並みが融合している校区である。全校の生徒は609人で、学級数は20（内特別支援学級2）であり、中規模校である。

II 実践のねらい

現在の子どもたちは、将来の夢や希望を見出せず、悩んだり、苦しんだりしている。また、自分らしく生きることができる「居場所」が少なく、自分に自信をもてなく、前向きに行動しようとする気持ちも薄れている。このめまぐるしく変化する社会で、自分らしさを発揮しながら、仲間とともに困難な状況を乗り越えていくことが必要不可欠となっている。

わたくしが受けもつ中学校1年生は、明るく元気で楽しそうに学校生活を送ることができている。しかし、仲のよい生徒どうしで一緒に居ることが多かったり、行事以外では必要以上に級友とかかわろうとしなかったりする生徒もいる。これは、他者とかかわることが苦手だったり、小学校の頃の人間関係のもつれから不登校や登校渋りを経験し、他者と接する機会を自分から遠ざけてしまっていたりするなど、誰とでも上手に接することの大切さに気付かず、前向きな気持ちで行動することができないためであると考えた。

そこで、「生徒どうしのつながりを深める活動」と「自他のよさをいかして、働きかけ合う活動」を通して、前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成をはかりたいと考え、実践にとりくんだ。

III 実践の方法

1 対象 第1学年3組 30人

2 基本的な考え

わたくしは、前向きな気持ちで行動することができる生徒を育成したい。前向きな気持ちで行動することができる生徒とは、生徒どうしによるつながりを深め、自他のよさをいかながら働きかけ合って行動することができる生徒であると考えた。

そこで、本実践では、「一年間、学級のみんなで楽しい学校生活を送るためには、どうしていくとよいか」を一人ひとりに考えさせ、学級目標を考えさせる。学級目標を生徒どうしで決定させた後には、決定した学級目標の達成に近づいているかを日々の生活をふまえて定期的に振り返らせていく。

また、生徒どうしのつながりを深め、誰もが楽しく学校生活を送ることができるために、「みんなにあいさつ大作戦」を実施する。この実践では、あいさつをする習慣を身につけさせながら、生徒どうしのつながりの量を増やしていく。そして、あいさつには、「する人」と「返す人」の両方が存在することを意識させて、あいさつの質を高めていくことで、生徒どうしのつながりをさらに深めていくようにする。

次に、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事では、「自他のよさに気付き、そのよさをいかして働きかける活動」を通して、一人ひとりに役割を与え、互いに認めたり、励ましたりしながら前向きな気持ちで行動することができるようにする。

3 各実践のすすめ方

実践1 生徒どうしのつながりを深める活動 「いろんな意味につながっているね」

【ねらい】 学級目標を生徒どうしで考え、決定させることで、楽しい学校生活を送れるようにする。

- 【すすめ方】
- ① どんな学級にしたいか、どんな学校生活を送りたいかを考え、一人ひとりが学級目標をプリントに書く。
 - ② 生活班に分かれて、考えた学級目標を発表し、班で1つの学級目標を決定した上で、全体で説明する。
 - ③ 発表した学級目標から、新たな学級目標を考えて決定してもよいことにする。

- 【留意点】
- ① 学級目標は、みんなが一つになってめざすことができるものに設定する。
 - ② 目標となる意味、意義がわかりやすく、伝わりやすいものにする。
 - ③ 班で発表したり、学級目標を決定したりする際は、他者の意見をきちんと聞くことや、他者の意見に共感することを心がける。

実践2 生徒どうしのつながりを深める活動 「あいさつするってのはどうかな？」

【ねらい】 生徒どうしで決定した学級目標を意識して学校生活を送ることができているかを振り返り、学級の課題に気付くことができるようにする。

【すすめ方】 定期的に振り返りを実施し、学級の課題を見つける。

【留意点】 学級目標の思いをふまえて、生徒どうしのつながりを深めるために必要なことは何かを考えさせる。

実践3 生徒どうしのつながりを深める活動 「よし、しっかりあいさつしていくわ」

【ねらい】 あいさつすることを通して、生徒どうしのつながりを増やしたり深めたりすることができるようにする。

- 【すすめ方】
- ① 登校時にあいさつをして、帰りの会で「あいさつカード」にあいさつをした級友の欄にチェックを入れる。
 - ② 教員が「あいさつカード」を毎日確認し、「あいさつした数」、「あいさつされた数」、「あいさつ返答率」を集計する（資料1）。
 - ③ 学級通信で「あいさつランキング」を発表したり学級の様子や教員の思いなどを記載したりして、生徒の意欲や継続性を高める。

あいさつ返答率

「あいさつされた数」÷「あいさつした数」×100で算出

例1 あいさつされた数が15回、あいさつした数が15回の場合

$$15回 \div 15回 \times 100 = 100\%$$

例2 あいさつされた数が15回、あいさつした数が20回の場合

$$15回 \div 20回 \times 100 = 75\%$$

例3 あいさつされた数が15回、あいさつした数が10回の場合

$$15回 \div 10回 \times 100 = 150\%$$

返答率が100%になることが一番望ましい。

質の高いあいさつは例1、質の低い挨拶は例2、3となる。

【資料1：あいさつ返答率について】

- ④ 一週間ごとに「あいさつ個票」で「あいさつした数」、「あいさつされた数」、「あいさつ返答率」を確認し、振り返りを行う。
- ⑤ 「みんなにあいさつ大作戦」は随時実施していく。

- 【留意点】
- ① あいさつの量を増やすようにし、あいさつをする習慣を身につけさせる。
 - ② あいさつが習慣化されてきたら、あいさつには「あいさつをする人」と「あいさつをされる人」がいることに着目させ、あいさつの質を高めさせる。
 - ③ 学級通信を毎日発行し、あいさつ状況を伝えたり、教員の思いを記述することで、あいさつへの意欲を高めさせたりするようにさせていく。

実践4 自他のよさをいかして働きかけ合う活動 「つながろう体育大会」

【ねらい】 体育大会にむけて、自他のよさをいかして、働きかけ合うことができるようにする。

- 【すすめ方】
- ① これまでのとりくみを振り返る。
 - ② 体育大会へののぞみ方を考える。
 - ③ 自他のよさに気付く。
 - ④ 自他のよさをいかして、体育大会で出場する種目を決める。
 - ⑤ 練習時に、級友のよさを認めたり、励まし合ったりする。
 - ⑥ 体育大会後、級友とのつながりを深めることができたかを振り返る。

- 【留意点】
- ① 教員は、自他のよさに気付かせるために、「よさ」の例示を行う。
 - ② 教科の教員に本実践を説明し、実施の承諾を得る。
 - ③ 仲間を認めたり励ましたりする伝え方を工夫する。

IV 実践の内容

1 生徒どうしのつながりを深める活動 「いろんな意味につながっているね」

学級目標を決めることは、学級全体で学級に対する思いや考え方を共有し、目標達成にむかってとりくむことで、生徒どうしのつながりが深まっていくと考えた。そこで教員は、4月の最初の学活で生徒に「どんな学級にしたいか、どんな生活を送りたいか一人ひとりの思いを書いてみよう」と伝えた。すると、生徒たちは「楽しい学級にしたい」、「男女平等、SDGsを意識していきたい」、「全力でやりたい」、「よいことをすると、自分に返ってきて、幸せの輪がドンドン広がるようにしたい」、「出会いを大切にしたい」などとプリントに記述した。



【資料2：班員で話し合っている様子】

その後、教員が「学級のためになる目標を考え、生活班で発表しよう」と伝えた。生徒たちの話し合いでは、「この学級目標はわかりやすいね」や「明るい感じがいいよね」など、楽しそうにとりくむ様子がみられた(資料2)。生活班での話し合い後、班で一つずつ学級目標を決定し、黒板に書いた(資料3)。

1班	明るい笑顔で、全力で	2班	3組矢の如し
3班	Sun	4班	一日一善
5班	七転八起	6班	一期一会

【資料3：班で発表された学級目標】

この学級目標案をもとに、班の代表者が学級目標に込められている思いを発表したとき、Aが聞き間違えた発言から新しい学級目標が誕生し、多くの生徒から認められる場面があった。

B： 3組矢の如しは、光陰矢の如しから考えました。それは・・・

A： え！？コインランドリー！？

C： いいね、覚えやすいね。

B： ……(少し困った表情で) 確かに覚えやすいけど、それってどういう意味になるのか教えてください。

A： 洗い終わった洗濯物のようなキレイな心をもつてことだよ。

D： 何かトラブルが起きても、水に流す、とかもあるね。

E： 清潔な教室を保つ、もありそうだね。

B： みんなの意見を聞くと「コインランドリー」っていろんな意味につながっているんだね。

この会話以外にも、「洗濯物を回すように、会話を回す」や「コインランドリーで物が落ちた時、『落ちましたよ』と気遣いのできる人になる」といった内容が出された。Bは、新しい学級目標への理解を示していたが、少し困った様子であったため、教員は「Bの班、そして全部の班の発表を聞いて、決めるようにしよう。学級目標は、みんなのためになることが大切だよ」と伝えた。教員の話聞いた後、Bはみんなに「コインランドリー、いい響きだし、意味もわかりやすくていいかも」と共感する発言をした。全部の班が発表した後、「コインランドリー」も含めた7つの学級目標案から多数決を取ったところ、「コインランドリー」が学級目標に決まった。

今回の活動で決まった学級目標は、教員による「動機付け」はあったものの、生徒どうしで学級目標を考え、決定することができた。今後は「コインランドリー」に決まった学級目標通りに「キレイな心」をもち、「話し合える」仲間と、「気遣い」をしながら学校生活を送ることができているかを定期的に振り返り、目標を達成しようとする過程の中で、生徒どうしのつながりを深めていきたい。

2 生徒どうしのつながりを深める活動 「あいさつするってのはどうかな？」

教員は学級目標を決めてから、学級の様子を常に見守っていたが、全員が学級目標を意識して行動しているようには見えなかった。そのため、学級目標通りの生活を送るには何が必要なのかをみんなで話し合った。

教員： みんな、学級目標を意識して生活しているか、少し心配しています。

B： 先生、「コインランドリー」のようにやってるよ。

C： 僕たちの心は、とてもきれいです！！

教員： うん、確かに。みんなの心はとてもきれいです！！

全員： (笑い声が聞こえる)

教員： でもさ、それ以外にあった学級目標の思いつて、何だったか思い出せる？

全員： (周りと話してざわついている)

D： 明るく、楽しくだったような……

教員： (悲しそうな表情で…) 仲間と話し合える、仲間に気遣いできる、だよ。

生徒は学級目標に込められている「話し合える仲間」「気遣いできる」という思いを意識しておらず、みんなが共有して行動していくことができていないと実感した。そこで、教員は、「目標達成のために必要なことは何だろうか？」と問いかけ、「生徒どうしのつながりを高

めていけば、目標達成に近づくよ。みんなができることを今一度考えてみよう」と伝え、生徒どうしで話し合うようにした。

E： 目標達成するために、「話し合える仲間」だと、具体的には何がありそう？
A： やっぱり、みんながかかわることがいいよね。
F： 「気遣いができる」だと？
F： う～ん、気遣いって考えると、(大分考えてから)あいさつするってのはどう？
C： おっ「あいさつ」することは、話し合うし、相手を気遣っていることにもつながるよね。

話し合いを終えた後に、教員は「みんな、いい気付きが増えたね」と生徒たちの話し合いの様子を笑顔で伝えた。そして、「今みんなが考えていることを書いてみよう」と伝えたところ、多くの生徒が目標達成にむけた考えを記述することができた(資料4)。

★ みんなのために、自分で決めたこと ★
できるだけ多くの人のかわりをつくること

★ みんなのために、自分で決めたこと ★
クラスのみんなに積極的に声をかけること

★ みんなのために、自分で決めたこと ★
自分からコミュニケーションをとれるようにがんばります。

★ みんなのために、自分で決めたこと ★
あいさつをきちんとする

【資料4：目標達成にむけた生徒たちの記述】

今回の実践を通して、多くの生徒が生徒どうしのつながりを深めるために必要なことは何かを気付くことができたと考える。今後は、生徒が見つけた課題を改善し、学級、学校が楽しく、前向きな気持ちで行動することができるための「生徒どうしのつながりを深める活動」にさらにとりくんでいくことにした。

3 生徒どうしのつながりを深める活動 「よし、しっかりあいさつしていくよ!!」

実践2での話し合いの中で、生徒Bの発言である「あいさつ」に着目し、生徒どうしがつながりをさらに深めることができるよう「みんなにあいさつ大作戦」を実施することにした。

校外学習が近づいた6月初旬の帰りの会で、教員は「あいさつカード」を配付してみんなと次のような話をした。

B： 「あいさつカード」??先生、これな～に??
教員： みんなのつながりをさらに深めたいと思ってね。
C： でも、なんであいさつなんですか？
教員： みんなが学級目標の振り返りで「あいさつをきちんとする」とか「積極的に話しかける」って書いたんだ。つながりを深めるためには会話という働きかけが必要だということを自分たちで感じているんだよ。先生は、会話の第一歩はあいさつだと思うんだよね。
C： なるほど～。楽しそうだね。
D： やってみようよ。

生徒たちは、少し不安そうな様子であったが、いろんな生徒にあいさつをしたりあいさつをされたりする数が増えていく中で、楽しそうな表情でとりくんでいる様子が日に日に増していった。その結果は、「あいさつした数」の平均値にも表れた。最初の日は平均値は3.96回であったが、次の日以降は、平均値が上がった（資料5）。

6月	6日（月）	3.96回
	7日（火）	13.75回
	8日（水）	11.96回
	9日（木）	12.34回
	10日（金）	12.89回

【資料5：学級でのあいさつの平均値の様子】

また学級通信で毎日の結果を公表したり、教員の思いを書いたりしたことで、「あいさつの数が増えたね」や、「あの子めっちゃあいさつしてるもんね」などの会話が学級全体で聞かれるようになった。あいさつの量が増えたことから、今度はあいさつの質を高め、つながりをさらに深めるために、「あいさつ個票」を配付した（資料6）。

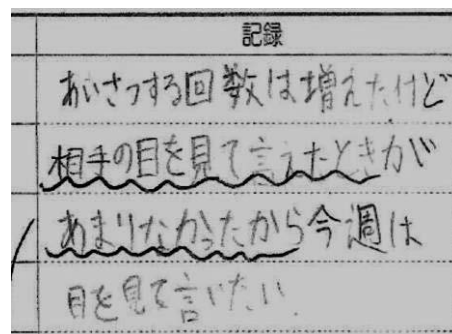
番号	6		
名前	C		
項目	あいさつした数	あいさつされた数	あいさつ返答率
6月6日	27	3	11%
6月7日	27	17	63%
6月8日	28	15	54%
6月9日	28	15	54%
6月10日	28	15	54%

【資料6：あいさつ個票(例：生徒C)】

教員： あいさつする人が増えて、先生はうれしいです。
 全員： （うれしい表情を見せる）
 教員： （何気なく）「あいさつ個票」を配付します。
 全員： 何これ？「あいさつされた数」、「あいさつ返答率」って何？
 教員： ふふっ、これはね～、あいさつがきちんと行われているかを確認するものです。もしかしたら、適当にあいさつをして、それを「あいさつした数」にカウントしてない！？
 C： 俺ちゃんとしてるし。
 教員： 「あいさつ返答率」で100%に近いか確認してみよう。生徒C、どうかな？
 C： ……。(結果を見て苦笑い)
 教員： あいさつはただ闇雲に「おはよう、おはよう。」って言えばいいってわけじゃないよね。あいさつをする、そして、あいさつが返される、これが本物のあいさつだよね。さらに、そこから会話がスタートすることができれば、お互いをもっと知ることができて、つながりは深まっていくよね。そんな、質の高いあいさつって、素敵じゃない？
 C： そっか、その通りだね。よし、しっかりあいさつしていくよ！！

この話し合いの後、教員は生徒たちに「みんなにあいさつ大作戦」を実施している期間は、「毎日のあゆみ」を記入するよう説明した。また、「毎日のあゆみに書くのは、感想だけではなく、質の高いあいさつをするための工夫や級友との変化があったことを書くようにしよう」とも伝えた。

生徒たちは、「目を見てあいさつをする」、「名前を呼んでからあいさつをする」など「質の高いあいさつ」をするための工夫を記述していた（資料7）。また、「あまり



【資料7：あいさつの質を高めるための記述】

しゃべらない人とあいさつができるのでなんか楽しいです」や、「今日も朝、いろんな人があいさつしてくれてうれしかったです。また最近、あいさつが増えているから、みんなにあいさつ大作戦が終わっても続くようにしたいです」、「今まで話をしたことがなかった〇〇さんや△△さん、◎◎さんと、あいさつをしてから会話ができるようになりました」と記述している生徒がいた（資料8）。

記録

今日も朝、いろんな人があいさつしてくれてうれしかったです。
また最近では、あいさつがふえてるから、このあいさつしようかんがわっても続くようにしたいです!!

【資料8：あいさつの質を高めるための記述】

またこの週は校外学習があったため、「校外学習で一緒になった人ともあいさつしたい」と記述する生徒もいた。

教員は生徒の記述内容を学級通信に載せて配付したところ、生徒たちは学級のみんながどんな風書いているかを真剣に読んだり、周りの生徒とあいさつ大作戦の話をしたりする姿がみられた（資料9）。



【資料9：学級通信を真剣に読む生徒の様子】

また、今まであまり話したことのなかった校外学習の班員とあいさつをする様子が増えたり、「〇〇さん、おはよう。今日も一日頑張ろうね」など、質の高いあいさつをしたことで、今までかかわりがなかった級友とも会話が始まったりする姿が多くみられた。この結果、この週の「あいさつした数」の平均値はすべての日で10回を超えていた（資料10）。

2週目の学級平均	
13日(月)	13.10回
14日(火)	11.10回
15日(水)	14.86回
16日(木)	校外学習当日のため未実施
質の高い挨拶平均 11.67回	

【資料10：2週目のあいさつの平均値】

あいさつの量のみを意識した前の週とは異なり、質も意識したあいさつにしたことで、ある程度あいさつした数は減ると予想していた。しかし、前週の結果とほぼ変わらない数値が出たことに教員はうれしく感じた。これは、生徒が「みんなにあいさつ大作戦」を前向きにとりくんだ結果であったと考えられるからである。

2週間実施した後に、「友情の深まりはどうなったか」のアンケートを取った。その結果、92.8%の生徒が友情の深まりがよくなっていると実感していることがわかった。

・とてもよくなった	14人	・まあまあよくなった	12人
・あまり変わらない	2人	・悪くなった	0人
(30人中28人回答)			

しかし、一部の生徒は、「みんなにあいさつ大作戦をしているから、数を増やそうとあいさつしているように思えた」と記述していた。このことから、生徒どうしのつながりが深まっていると実感することができていない生徒もいることがわかった。そのため、生徒全員でつながりが深まっていると実感することができるように、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事を活用して「自他のよさに気付き、そのよさをいかして、周りを認めたり、励ましたりしていく実践が必要だと考えた。

4 自他のよさをいかして働きかけ合う活動 「つながろう体育大会」

「みんなにあいさつ大作戦」では、級友とつながるきっかけをつくることはできたが、つながりを深めるまでには至らなかった。そこで、自他のよさに気付き、そのよさをいかしながら、つながりを深めることができる「つながろう体育大会」を実施することにした。

教員： もうすぐ体育大会が開催されます。あなたたちは、どのような気持ちで体育大会にのぞみますか？
 A： 絶対に優勝したい！！
 B： でも、あのクラスには勝てないよ。
 C： そんなのやってみないとわかんないじゃん！！
 D： でも、俺らってそんなに運動、得意じゃなくない！？
 教員： ありがとう。そうなんだよ。30人もいるんだから、運動が得意な仲間もいれば、あまり得意じゃない仲間もいるよね。
 B： そうだよ。楽しくできりゃよくない！？
 E： 順位なんて気にせず、とりあえず頑張るってどう！？
 F： それじゃ、3位以内をめざしてみたら！？
 A： いいね。3組っぽいね！！

この後の話し合いで、学級全体で「勝つことよりも楽しむことを優先しよう」と決まった。そこで担任は、もう一度学級全体に問いかけた。

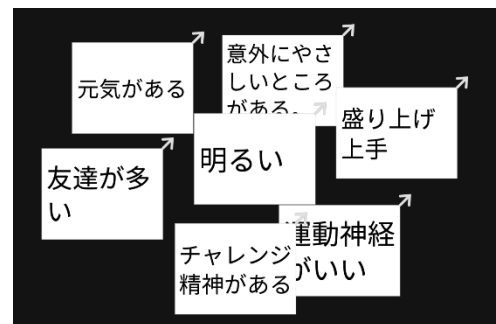
教員： もう一度聞くけど、楽しむって、どういうこと！？
 E： みんなで応援したり、協力したりして、誰かが嫌な思いをしないことです。
 F： そういえば、生徒Eさんに応援されてうれしかったことがあります！
 G： わたしが困っているときに、声をかけてくれたのは生徒Aさんでした！
 教員： 仲間を励ますことができるのは、とても大事なことだよな。
 全員： （うんうんとうなずく）
 教員： わかりました。みんながそれぞれのよさをいかせる体育大会になったら、みんなのめざす体育大会になるんじゃないですか？
 B： そうか、楽しく体育大会をやるってそういうことか！
 D： …でも、俺のよさって何だろう？

この話し合いにより、楽しい体育大会にするということは、一人ひとりのよさをいかして協力することだということがわかった。しかし、自分のよさを知らない生徒がいることもわかったため、級友から自分のよさを教えてもらう活動「ICTでつながろう」を設定することにした。

「ICTでつながろう」では、学習支援クラウドの生徒間通信を活用して、生徒どうしで、互いのよさをテキストで送り合った(資料11)。

生徒たちは、「私って、こんなにもいいところがあるんだ」や「自分のことをやさしいとは、思っていなかった」など、たくさんの自分のよさに気付くことができていた。このよさを発揮できる体育大会での種目決めを生徒どうしで話し合った。

数日後から、体育の授業で体育大会の種目別練習が始まった。練習では、級友のよさや工夫に対して、認めたり励まし合ったりする様子がみられた。

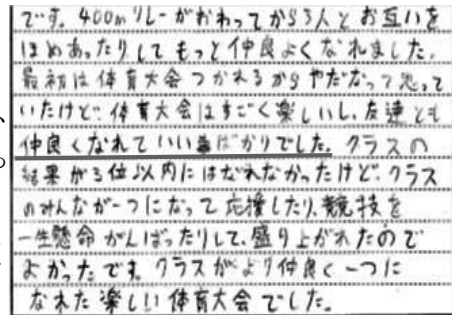


【資料11：級友から届いた自分のよさ】

A： 私がリレーの練習をしている時に、生徒Bが声を出して応援してくれていて、とてもうれしかった！
 C： 生徒Dも、一緒に応援していたね！
 B： 生徒Fは、たくさんの人に走り方をアドバイスしていたよ！
 D： 楽しく練習するって、こういうことか！

体育大会当日、結果は3位以内に入るとい

目標は達成できなかったが、生徒は充実した顔で体育大会を終えた。体育大会の振り返りを書かせたところ、多くの生徒が「応援する側もとても盛り上がり、楽しめました」や、「全員で協力して、がんばったからとてもよい思い出になりました」、「学級の一体感が楽しかった」と好意的な記述をしていた。また、「すごく速かったよ」、「がんばってたね」などの級友の声かけがうれしかったとも記述した。Dの感想では、「お互



2. 400mリレーができて、5人とお互いを
ほめ合ったりして、もっと仲良くなれました。
最初は体育大会が怖かったけど、2週、3週
いたけど、体育大会はすごく楽しいし、友達と
仲良くなれて、いい思い出でした。クラスの
結果が3位以内にはなれなかったけど、クラス
のみんなが一つになって応援したり、競技を
一生懸命がんばったりして、盛り上がったので
よかったです。クラスがより仲良くなりました。
なれた楽しい体育大会でした。

【資料12：認め合いのよさを実感する生徒Dの記述】

いを褒め合ったりして、もっとなかよくなれました」など、級友どうして認め合いながら練習や本番にとりくめていたことがわかった（資料12）。

実践後に、「クラスには、いい人だなと思う友だちや、すごいと思う友だちはいますか」というアンケートを取った。その結果、「とても思う」が22人(75.9%)、「まあまあ思う」が5人(17.2%)、「あまり思わない」が2人(6.9%)、「思わない」が0人(0%)となった。

また、実践の前後の「あなたは、運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味などでクラスから認められていることがありますか」というアンケート結果を実践の前後で比較すると、右記の結果になった（資料13）。

このことから、実践を通して、級友のよさを認められる生徒や、自分のよさを認められたと実感している生徒が増えていることがわかった。しかし、認められたとまったく感じていない生徒が1人から3人に増加していることから、学級全員が参加できる認め合い活動を行う必要があると感じた。

	実践前(28名)		実践後(29名)	
とても思う	3	10.7%	5	17.2%
まあまあ思う	11	39.2%	13	44.8%
あまり思わない	13	46.4%	8	27.5%
思わない	1	3.5%	3	10.3%

【資料13：実践前、実践後のアンケート比較】

V おわりに

本実践の期間中、わたくしが新型コロナウイルス感染症感染者との濃厚接触者となり、出勤できない状況があった。後日、出勤すると学年の教職員から「3組の生徒たちがあいさつ活動をとりに来ていましたよ」という報告があった。すぐに生徒に聞いてみると、「みんなで話し合って『みんなにあいさつ大作戦』をやろうと決めました」と話してくれた。また、自然にあいさつする生徒が増え、「3組の生徒はよくあいさつをしてくれるので、授業が気持ちよく始められます」と他の教員から言われたり、係以外の生徒が、配達係や掲示係の生徒を手伝ったりするなど、あいさつだけでなく、学校生活にも前向きにとりくんでいる様子がよくみられるようになった。

しかし、課題としては、学級全員が参加できる認め合い活動ができていなかったため、生徒どうしのつながりがまだ十分に深まっていないと感じている生徒が一部いることである。

現在、11月に行われる合唱コンクールにむけて学級全体で合唱練習にとりくんでいる。合唱練習では、一人ひとりが役割を担うことで、全員が責任をもって役割を果たせるようにしている。ここでも認め合い活動を実践しているため、合唱コンクールでは、より多くの生徒が、前向きに行動することができるようになると考えている。今後も前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成にむけて、自己研鑽に励んでいきたい。